

不可視化される占領と強調される戦争体験の残存性

野間宏『崩解感覚』論

秀 島 希 望

一 はじめに

野間宏『崩解感覚』（『世界評論』一九四八年一、二、三月）は、一九四七年の東京を舞台に、元陸軍二等兵及川隆一のとある一日を描いた物語である。

物語冒頭、恋人西原志津子との待ち合わせ場所に向かうとする及川隆一は、下宿の主婦に呼び止められ、同宿の大学生荒井幸夫の縊死を知らされる。その縊死体との対面を契機に、隆一は戦地で手榴弾自殺を図った際に体感した「自分の周囲に存在している外的世界や自分の内部に自分を形づくっている内的世界が形を失って行くような」（『崩解感』）を喚起され、それから逃れるかのように志津子への欲

求を高めていく。しかし、隆一が志津子との待ち合わせ場所である飯田橋へ着いたのは、待ち合わせ時間の一時間後であり、隆一は一人飯田橋から九段三丁目へと歩く。物語結末では、志津子への欲求が冷めないまま床に付く隆一に、再び〈崩解感〉が蘇り、そこから軍隊で経験した集団私刑の様子や志津子の姿、そして縊れた荒井幸夫とその部屋に干された「白い洗濯物」といった光景が次々に再現され、戦争体験と戦後の連続性が示唆されている。

本作は複数の先行研究で初期野間作品の「綜合点」¹や「結節点」²と位置付けられてきた。そのため初期作品群のうち、いわゆる「肉体もの」と称される作品群³との関連の中で及川隆一の身体が注目され、実存主義的または身体

論的に論じられる傾向がある。

例えば本多秋五「戦後文学の第一声」⁴では、及川隆一の欠損した左手を「野間的にまことに特徴的」であり、及川隆一の「左右に」「隣人の自殺屍体」と「あいびきを約束した情婦」とが配置され、「そういう配置図形のバランスをとりながら、腎臓か膀胱のあたりでものを考えた小説」であると評されている。また小笠原克「崩解感覚」⁵では、及川隆一の戦争体験の残存性が注目され、「たえず現在する過去に緊縛された人間の生存の実相を」、「二十世紀世界文学を領導した新心理主義的方法に寄り添うだけでなしに」⁶「内臓感覚」をもって、前人未到の表現世界を出現させた」作品と本作が捉えられている。そしてまた紅野謙介「『蜘蛛』のいる街―野間宏『崩解感覚』試論」⁶では、本作の匂いや音に注目し、それらの「感覚」が「近代的知性や自我と呼ばれる認識の枠組み、その虚構化された自明性を喪失した及川」の「身体を定位」し「支えている」と指摘されている。

しかし、これらはいずれも小説表現に即して分析したもののというよりは、小説全体から得られる印象を抽象的に述べたに過ぎないものである。本稿では、野間宏の創作意図としてよく知られる、人間を「心理、生理、社会」の面か

ら捉える「全体小説」の試み⁷との関連から、及川隆一が戦後の社会をどのように捉えるのか、あるいは隆一が捉えようとしなかったものは何かを明らかにする。

本稿第二章一節では及川隆一の彷徨場面に注目し、隆一にとって明確な関係があるにもかかわらず描かれない空間を指摘し、「全体小説」における「社会」の欠落を指摘する。二節では、及川隆一の志津子の「肉体」への執着が、志津子の属性の不明確さに繋がっていることを指摘し、一節同様、戦後の「社会」を直視できない及川隆一のありようを明らかにする。そして三節では、戦後のあらゆる事物が、及川隆一の「心理」及びそれと結びつく「生理」に根深く残存する（崩解感）へと接続し、隆一の身体を解体し続けることを指摘する。それによって戦争・戦後を容易に分断できない復員者及川隆一のありようを明らかにし、同時代文学との比較を通して『崩解感覚』の特異性を探求する。

二―一・不可視化される占領

及川隆一が志津子との待ち合わせ場所である飯田橋に到着したのは、約束の時刻から一時間以上が経過してからであり、及川隆一は「この風景の焦点となる、特別の支点、

志津子がいらない」ことを確かめ、飯田橋から「一口坂停留場の前」に出る九段三丁目の上り坂「付近まで歩みを進める。『崩解感覚』に登場するランドマークに注目し論じた野中潤は、及川隆一が〈靖国神社〉へ続く道のりを歩行している」と指摘している。

「九段」という地名からすでに明らかだと思うが、及川隆一の左手には、大村益次郎が高燥の良地を選んで建立した「東京招魂社」、つまり「靖国神社」があるのだ。「…」しかも、「Ⅱ」の終わり近くで及川隆一が立ち止まった九段三丁目の坂道にある牛込電話局の角は、靖国神社の裏門まで百メートル足らずしかない場所なのだ。

『崩解感覚』の舞台でもある一九四七年に米空軍が撮影した航空写真を元に作成された「GHQ東京占領地図」(原題CITY MAP CENTRAL TOKYO)を見る限り、野中の指摘は首肯できる。では、及川隆一は〈靖国神社〉周辺の空間をどのように志津子と歩いてきたのか。

道を右手にとったとは言え、この辺りの景物の一つ一つには、志津子の息や、べにの色や、ストッキングや、汗のういた掌の体温が付着しているのである。「…」彼はただ、この道の先に拡がる焼跡のくさむらで、志津

子の押しつけてくる顔の手ざわりを得ることを考えて、体をふくらせ、歩いて行くのだった。

志津子と逢瀬を果たせず、一人で九段を歩く及川隆一は、志津子の官能性を帯びた身体部位を想起し、それが「景物の一つ一つ」に「付着」していると認識しており、及川隆一と志津子は野外性交を連想させかねないほど密接に九段を複数回歩いていることがわかる。野中は、ここに「靖国神社」に象徴される戦争の記憶」の「抑圧」を看取しているが、かつて九段が軍人を主な客層とする花街として栄えていたということを鑑みれば、野中が指摘する以上の違和感が指摘できるだろう。

加藤政洋『花街―異空間の都市史』¹⁰によると、維新後の明治二年、後に九段を代表する待合となる「菊の家」の初代・長岡仁兵衛が、山の手の繁盛を期して花街の新設を思い立ち、参議・広沢真臣を後ろ盾に〈靖国神社〉の境内に出店した茶店が花街の端緒となり、昭和初年には芸妓屋が約一〇軒、そして待合が約二一〇軒に増加しており、明治期から昭和にかけての九段は一大花街であったことがわかる。そして上村敏彦『東京 花街・粋な街』¹¹では、太平洋戦争に突入してからは酒類の仕入れも厳しく、物資も統制が強まり、一九四四年には企業整備令で休業状態になり、

さらに一九四五年三月一〇日の東京大空襲で花街一帯は焼け野原となり、立派な組合事務所も焼け落ちたことが記されている。また戦後は一九五〇年の朝鮮動乱を契機に九段花街にも賑わいが戻り、料亭組合数も八三軒となったことが同時に述べられている。つまり『崩解感覚』発表時の九段花街は、一九四四年の休業状態から一九五〇年の朝鮮動乱を契機にかつての賑わいを取り戻し再発展していくまでの期間にあたるのだ。また、『新編千代田区史』¹²によると、

靖国神社 周辺に廃墟と化していた旗本・御家人の屋敷が多くあり、参拝に来る軍人の遊び場がなかったため、それらを待合として利用したという経緯が述べられており、九段花街が軍人を主な客層として成立、発展していったことが推察できる。以上のことから、九段は〈靖国神社〉に象徴される死者の空間と、そこに参拝に来る軍人の遊び場となっていた花街が重層的に存在する空間だったといえる。

さらに井上章一『愛の空間』¹³によると、東京や大阪などの大都市が米軍の空襲により破壊された戦後は、性行為を営むための屋内空間が不足しており、皇居前広場までが野外性交の場として利用されていたという。それらの状況を鑑みると、及川隆一と志津子のありようは、決して違和感のあるものではない。しかし、及川隆一が元陸軍兵士であ

り、さらに軍隊での集団私刑を苦に自殺未遂を図り、戦後も軍隊生活の名残に対して嫌悪感を抱くにもかかわらず、軍人の性愛空間として栄えていた空間に対し些かの抵抗も示さずに、志津子との性愛空間としてしまうのはあまりにも不自然である。

及川隆一が〈靖国神社〉目前まで歩みを進めた際、語り手はその理由として、

この一口坂停留場の前に出る九段三丁目の上り坂が、彼の心呼びよせると言ってもいいのである。この右手に広がる焼跡のくさむらが、背丈の高い野菊のしげみを風にゆすつて、彼をまねいている。

と語る。この「九段三丁目の上り坂」を〈靖国神社〉方面に約八〇〇メートル前進し九段一丁目へ向かうと、そこには複数の接収地が存在する¹⁴。

接収された九段一丁目の施設は、陸軍将校の修養・親睦団体である偕行社、陸軍参謀本部の直轄で刊行された対外宣伝雑誌『FRONT』を編集出版した東方社がある野々宮ビル¹⁵、軍の訓練や宿泊施設として利用されていた軍人会館がある。そして偕行社は「ミトリ・ホテル」として婦人宿舎に、野々宮ビルは家族宿舎に、軍人会館は「アーミー・ホール」として極東空軍の宿舎と、それに付随する

オフィサース・クラブやホールに使用されており、九段一丁目には多くの占領軍兵士が行きかう空間だったと予想される。

そしてまた、及川隆一を「まねいている」かのような「背丈の高い野菊のしげみ」とは、天皇家の家紋である菊を連想させるものであり、英霊の化身であるかのように解釈できる。つまり、志津子との逢瀬は、「野菊」が群生する「焼跡」や、「靖国神社」、及び接収地とが同居する空間で繰返されているのである。そのため、及川隆一が立ち止まる「九段三丁目の上り坂」とは、「野菊」や「靖国神社」に象徴される戦争の記憶と、接収地に象徴される敗戦後の占領と、それらが重層的に存在する場所だといえる。しかし、及川隆一は志津子を「特別の支点」とすることで、それらの空間を背景化させ直視しようとしていない。それは、戦争や占領が描かれないということであり、野間の「全体小説」の試みにおける「社会」の欠落が指摘できる。

二二二 明言されない志津子の属性

志津子を「特別の支点」とすることで、接収地や戦争を象徴する空間を背景化させる及川隆一であるが、志津子と

はどのような女性か。先に引用した野中は、志津子の「アイム・サリ」という「怪しげな英語」や及川隆一を「飯田橋のガード下」で待つ姿などから、「性を売り物にして敗戦後の厳しい時代を生き抜こうとする女性」のイメージ、つまりパンパンのイメージを読み取っている。

「銀座を歩くことに喜び」を感じる西原志津子が、「週に二回は数寄屋橋を渡らなければならない」というのは、オンリーとして米軍の高級将校に会わなくてはいけないということの婉曲的な表現に他ならないと言えないだろうか¹⁶。

しかし、志津子がパンパンであるという確証はテキストからは得られず、また、もし志津子が米軍の高級将校のオンリーであるならば、なぜ及川隆一と結びつくのか疑問が生じる。さらに、同時代のパンパン表象と比較してみた際に、占領軍の不在が『崩解感覚』には指摘でき、野中が見出す志津子のイメージには疑問を呈せざるを得ない。

武田泰淳『風俗一齣』（『言論』一九四六年一月）では、東京から田舎へ疎開した邦子・昇母子のもとに、邦子の旧友光子が訪ねて来る様子が語られている。光子は、敗戦後の時局とは不釣り合いな「けばけばしい化粧の香りや服装」に身を包み、「煙草」を吸いながら邦子に自身が経営する店

とともに働かないかと誘いをかける。その際に交わされたやり取りを以下に引用する。

「それで、どう云ふお仕事なの」／「…」／「面白いわよ、アメリカ人相手だから屈託がなくて、こんな時勢にはお互いに少しは莫迦にならなくつちやアねえ」／「…」／「と云ふと、占領軍向きの土産物でもやつてるの」／「…」／「そんなみみづちいもんぢやないわよ、キヤバレを大森に開いたのよ、キヤバレと云ふより慰安所なんだけれど」

この引用から明らかなことは、光子が自身の性を売り物にして生き抜く女性として造形されており、同時に買い手である「アメリカ人」、つまり占領軍が『風俗一齣』には明確に描かれているということである。そしてそれは、石川淳『黄金伝説』（『中央公論』六八号、一九四六年三月）にも見える。

『黄金伝説』の語り手「わたし」は、横浜にある焼跡のバラック店で「ひそかに懸想している女人」と偶然再会し、彼女の振る舞いに「良家の出のひとつもおもわれず、また火災で夫と家をうしなつた悲恋の人とも見え」ないと、その変貌ぶりを語る。彼女がパンパンとして生計を立てていることは、彼女が所有する「ハンドバッグ」の中に「ラッ

キイ・ストライク」や「チョコレート」など「この国の産とはおもわれない品品がいっぱい詰まつ」ていることや、「わたし」との別れの場面からわかる。

駅の近くまで来ると、今までわたしに身を寄せていたひとは突然ぱつとわたしを突き放して、つい向うへ駆けだして行つた。「…」向うを見ると、そこに、群衆のあたまの上にそびえて、すばらしくせいの高い、あやしいまでに色の黒い、一箇の頑強な兵士が立つていた。「…」そして、兵士の厚い胸板のあたりに、蝶が木の幹にとまるように、赤づくめの衣装をきたひとのからだがぴったり抱きついていた。

この場面に對し、マイク・モラスキー¹⁷は、「当時の読者にはその「兵士」とは占領軍の黒人兵であり、彼女が「蝶」（パンパン）になっていることが十分に伝わったはずだ」と指摘している。つまり、『風俗一齣』ほど明確には語られていないものの、「女人」が占領軍の黒人兵相手に自身の性を売っていることが『黄金伝説』には婉曲的に描かれているのである。

以上、武田泰淳『風俗一齣』及び石川淳『黄金伝説』を参照しパンパンと呼ばれる女性たちがどのように表象されているのか確認した。両作には、当時の人々の生活状況の

中では異質な派手やかさを有する女性が登場し、彼女たちはパンパンとして占領軍と結びつき、世渡りをしていく「どこ迄も強い女」として描写されている。これは、野中が見出す志津子像と一致するものである。しかし、両作からは占領軍兵士と女性との関係を容易に看取できるのに対し、『崩解感覚』には占領軍兵士を連想させるものは登場していない。ここに、志津子と同時代他作品のパンパン表象との異質さが指摘できる。

さらに、志津子の発する「アイム・サリ」に対して、野中はいわゆる「パングリッシュ」¹⁸を連想しているわけだが、「アイム・サリ」の発音が「彼女が通っていた会話学校の外人教師の発音にならってなされたのにちがいな」と語られていることに注目すると、この「アイム・サリ」は志津子の知識欲を裏付けるものとして機能していると考えられる。

共同通信社『The Chronicle—ザ・クロニクル戦後日本の70年—1』¹⁹には、一九四五年九月八日に占領軍が東京に駐屯し、「道路や駅名、公共施設の看板をローマ字で表示する指令を出」すとともに、多くの占領軍兵士が街を行き来する様子が伝えられている。そして、

陽気な外国人兵士に触れた日本国民の多くは、米国と民主主義に親しみを覚え、生活難の中で英会話を習う

人たちも出てきた。

と、占領軍の駐屯をきっかけに日本人が英語への関心を高めていく様子が同時に述べられている。日本人と英会話の関係を今しばらくみてみると、一九四五年九月一日に発行された英会話用の小冊子『日米会話手帳』が戦後初のミリオンセラーを記録し、また一九四六年二月一日に放送が開始された『カムカム英語』が、会話のレッスンと軽快なテーマソングで人気を博していたらしく²⁰、『崩解感覚』の物語舞台である一九四七年当時は、英会話がブームであったといえる。そのため、志津子の発する「アイム・サリ」は、「或る程度の教養をもった」女性と語られる志津子の知識欲を裏付けるものと捉えることが出来る。すると同時に、志津子が及川隆一に惹かれる必然性も自ずとみえてくるだろう。

及川隆一に焦点化し、志津子との関係性を語る語り手は、二人の関係が「ただ肉体」のみで成り立ち、「二人の結びつきには、しっかりとした必然性というものはない」と語る。しかし、及川隆一が三〇代で大学の研究室に身を置き、荒井幸夫の通夜に訪れる学生達から「及川先生」と呼びかけられることを鑑みると、志津子が及川隆一に惹かれるのは、『九段下の書店』に集まる学生達と及川隆一の佇まいが異質

であり、また及川隆一の教養が他の学生と一線を画すものだったからだと考えられるのである²¹。

そのため出会った当初の二人は、

最初は勿論、殊勝げに、書物の話や、映画の話を交し、間もなく、あの二人の本体の肉欲が、二人を二人らしく結んでしまったのだった。

と、現在と対比的に語られるのだ。それは以下の引用にもいえる。

もはや、最近二人は、以前の二人で歩き廻った銀座を歩くということもなくなった。「…」そしていまはただ欲望の蓄積が何日目かに二人を会わせて烈しい肉欲の浪費を行わせるだけである。

つまり、二人はかつて、「殊勝げに、書物の話や、映画の話を交し」、リトル・アメリカと呼ばれ歓楽街として栄えるなど文化の中心でもあった銀座を「歩き廻」るような知的な関係を築いていたのである。しかし、二人の関係は、肉体関係を経ることで現在の「肉体」のみで繋がっているかのような関係に変化していくのである。そして及川隆一が「肉欲」によって志津子の「肉体」のみに惹かれ、志津子の素性が明確に語られないというのは、戦争を象徴する空間と接収地を直視しないのと同様の構図であり、ここにも「社

会」の不可視化が指摘できるとともに、それを成立させる及川隆一の「心理」及び「生理」に刻まれた戦争の傷跡の深さを看取することができる。

二一三、〈崩解感〉の連続性

及川隆一と志津子との関係は肉体関係を経たことで変化していくが、志津子との性交はどのように語られているのか。彼の掌が、彼女の肌にふれる。女の肌の弾みが彼の手の下ですべる。彼の手の女の肌にふれた部分が、生きかえる。「…」彼の頬は女の頬のなかにしずみ、彼の顔は女の体の中にはいり、彼は弾力のなかに自分をうめる。このようなとき彼の意識は対象から解放される……彼の周囲から存在が姿をけす。ふつつつとした暗い沸騰だけが、彼の身内にみなぎり、閃光がそのなかを横切る。「…」彼は世の中からはなれている。この弾力が世の中と彼との間にはさまって、彼をまもっている。彼は日常の世界からどこか別の世界にうつる。そして彼は自由であり、彼は解放される。……勿論のこと、これは偽りの自由であり、偽りの解放である。

山田稔²²は、この場面における「女の肌は「…」彼に彼の

生存を保証する」という一文に注目し、及川隆一の「母胎
回歸願望」を見出している。たしかに、「女の肌」に埋没す
ることで「まもられ」るような感覚になり、また「生存を
保証する」かのような「志津子の体」が「母胎」を連想さ
せたとしてもおかしくない。しかし、性交によって得られ
る「自由」や「解放」は「偽り」であり、一時的なものに
過ぎず、山田の指摘は誤りであると言わざるを得ない。な
ぜ、志津子との性交は一貫した効果を及川隆一にもたらさ
ないのか。それは性交と「崩解感」の類似性による。

彼が編上靴の底に手榴弾の信管をぶっつけ、十三まで
数をかぞえたとき、膀胱と排泄器官の辺りを沸騰した
湯水が流れて行くような恐怖が彼の身内におとずれ、
「…」そしてこの人生から自分自身をしめ出そうと自分
に強制したあの瞬間のあの暗い頭の奥や胸や腹や腸や
その辺りに拡がっている眩暈のような感覚が再びあざ
やかに思い起されてきた。

及川隆一の「崩解感」は「膀胱と排泄器官の辺りを沸騰し
た湯水が流れて行くような恐怖」を伴うものであると語られ
おり、射精との類似性が指摘できる。また、「崩解感」が「眩
暈のような感覚」と言い換えられているが、これも志津子
との性交と共通するものである。

彼はいままなお、自分の体が志津子の体を求めている
のを感じる。「…」そこだけが彼に彼の生存を保証す
る。「…」互いの肉体に互いの肉体を埋没させ、肉体の
深みで、あのけむった眩暈を起こさせて……
即ち志津子の「肉体」は、及川隆一の「生存」を唯一「保
証する」ものであるとともに、及川隆一に「崩解感」と類
似する作用をもたらしてしまう危うい両義性を孕んでいる
のだ。

さらに、「眩暈のような感覚」は、荒井幸夫の縊死体と対
面した際に誘発される感覚でもある。

頸をかすかに左に廻したとき、及川隆一は自分の顔の
すぐ傍に死人の重い体重がだらりとたれさがっている
のを認めた。「…」彼は彼の内部で彼自身が無限回顛倒
のような精神の眩暈を感じた。

つまり、及川隆一が戦地で体験した「崩解感」と志津子と
の性交、及び荒井幸夫の縊死体から得る感覚はいずれも「眩
暈」として連続するものである。それと同時に、「崩解感」
に象徴される解体のイメージを「崩解感覚」からは複数取
り出すことが出来る。

例えば、及川隆一が「九段三丁目の上り坂」で「焼跡の
くさむら」を捉えた際に起こる「彼の視覚が、少しずつは

ぎとられて行くような、彼の神経の一部が裏返しにされていくような」感覚や、寢床の中で荒井幸夫の部屋にかけられた洗濯物の光景を想起した際に起こる「自分の意識の中心を打つ濡れた白い色が、彼の意識を幾つかの細片に分割する」ような感覚にみる事ができる。そしてそれらは、いづれも及川隆一の戦争体験と関連するものである。

まず「焼跡」は、爆撃によって発生した空間であり、そしてそこには英霊の化身であるかのような「野菊」が群生し、またその周辺には「靖国神社」があるという点で、及川隆一に戦争体験を喚起させる空間であるといえる。次に荒井幸夫の部屋に干された洗濯物の一つである「兵隊靴下」には、「赤い皮革の染みの色」が付着しており、行軍の記憶と結びつくものである。つまり、たとえ戦後の時空にあったとしても、戦争と結びつく事物は及川隆一に解体のイメージをもたらすのだ。

その一方で、荒井幸夫の発した「ゾルレン」もまた、及川隆一の身体を不安定なものとしており注目できる。

「ゾルレン的にみて、ゾルレン的にみて。」と彼はこのへんてこな言葉を再び口の中で言ってみた。「……」口の辺りが堪えがたく、頬がさびしく、救われたい気がする。「……」それは全身に拡がり、そしてまた身体が

深みへ下りて行く。彼の身体の中心部までたっし、彼の身体の張っている磁場をゆすぶる。すると彼の内部に何ものかが、手をさし入れて、内から、かすかに彼の肉を引きかいているような痛みを交えた不安が、彼の背骨を沿うて下から上ってくる。

自殺する二か月前、荒井幸夫は及川隆一の部屋で学問に関する談義を持ちかけ、「ゾルレン的にみて、自分というものを賭けなければ、二律背反の域には絶対に達しないと僕は思うのです」と語る。及川隆一はその荒井幸夫の姿に、自身の学生時代を重複させるとともに、荒井の「思考操作の誤り、滅茶苦茶な概念の使用法に笑いを感じながら」もそれを正そうとしない。それは、軍隊生活で学問の無力さを実感し、学問への情熱を失ったからである。

《これが俺なんだ……これが俺という人間なんだ。》「……これが俺なんだよ……これが俺の学問なんだ……そして、結局、学問なんてものは、こんなものなんだ」

この引用は、寢床に就く及川隆一のもとに再び〈崩解感〉が訪れ、戦地における集団私刑の光景、及び討伐行軍中に弱りはてて「分隊長、自分は咯血したのであります。」と虚偽の申し立てをする自身の姿が浮かんで来た際の、及川隆一の独白である。及川隆一の戦争体験と彼の学問とは一見

すると連続しないものであるが、及川隆一が学生時代にジレットナイフによって自我を築いていたことを鑑みると、及川隆一の内部では確かな繋がりを示すものであり、学問の無力さの実感が、及川隆一の自殺未遂に繋がっていると考えられる。そのため、学生時代の自身を想起させる「ゾルレン」もまた、〈崩解感〉と類似する作用をもたらすのだ。

そして、戦前の学生時代の自身を回顧させる「ゾルレン」や、〈崩解感〉と同様の感覚を発生させる志津子、及び荒井幸夫の縊死体とその部屋に干された「白い洗濯物」、それらすべてが自身の戦争体験と連続性を持って及川隆一に認知されていく様子が物語の結末には描かれている。

『何という奴だろうな、俺という人間は、ゾルレン的にみて……』と、やがて、彼の瞼の上だけに睡眠がおとずれていて、しかも、どうしても、ねむることのできない彼の眼界の中に、兵隊姿の彼と舌を出した荒井幸夫と、ポケットの中の手をつき出して向こうをむいた志津子の姿などが、入りみだれ、重なり合い、移って行った。そして、今度は、再び、暗い視界の中から、膀胱の辺りの膨張感があらわれ、それが痛みをともなった肉欲の快感感に変わり、そして、またあのぐにやりと

肉のくだけ去る崩解感になると、又もや、彼の意識の中を、ぺたぺた、窓辺の白い洗濯物がたたきはじめる。

『ゾルレン的にみて、ゾルレン的にみて……』

このように、自身の戦争体験と戦後が分断されることなく、及川隆一を絶えず解体し続けていく。そこには及川隆一の「心理」や「生理」を破壊した〈崩解感〉の根深さを見出すことが出来るとともに、同時代の「肉体文学」と比しての異質さを見出すことが出来る²³。

「肉体文学」の旗手として知られる田村泰次郎は、「肉体が人間である」（『群像』一九四七年三月）で、日本が戦争に参加し、敗戦した理由を、「肉体をはなれた私たちの「思想」こそ、その重大な原因の一つだと思ふ」と述べ、「肉体の上に立たない人間性が、なんの力があるだろうか」と疑問を投げかける。そして、「これまでの肉体をしばつてゐたいろんな制約を解いて」「人間を構成する基本的条件である肉体を自由に解放」することを主張し、敗戦後の時局をパンパンとして逞しく生きる少女たちの姿を『肉体の門』（『群像』一九四七年三月）で描いた。それにおいて彼女たちは敗戦を機に「制約」から「解放」されていく存在として描かれている。

法律も、世間のひとのいう道徳もない。そんなものは、

日本がまだ負けないとき、彼女たちが軍需工場のなかで汗と機械油にまみれているときを最後に、爆弾と一緒に、――そして彼女たちの家や肉親と一緒に、どっかへふっとんでしまった。なんにもなくなつて、彼女たちは獣にかえつたのだ²⁴。

「法律」や「世間のひとのいう道徳」、つまり「制約」からの「解放」を象徴するのが、グループのリーダー格であるせんと、ボルネオ・マヤである。せんは、左の上膊に「関東小政」という刺青を彫り、「群」の掟を犯す者にそれを見せつけ見栄を張る。そのためこの刺青は、これまでの「制約」からの「解放」と、新たに自分たちで作り上げた「掟」を可視化させる装置といえよう。そして、その「掟」からも逸脱していくのがマヤである。マヤは、代価を得ずに相手に自分の肉体を与えないという「掟」を破り「肉体のよろこび」に目覚め、それによって「自分の新生がはじまりつつあるのを」予感し、それを手放すまいと決意している。即ち『肉体の門』では、戦中と戦後の分断を、女性の身体の変容によって表現するような意識が読み取れるのである。

また、しばしば「肉体文学」の系譜のなかに数えられる坂口安吾は、「肉体自体が思考する」（『読売新聞』一九四六

年一月一日）で、「精神の思考を離れて肉体自体が何を語るか、その言葉で小説を書かねばならぬ」と主張し、男性視点の語り手による『戦争と一人の女』（『新生』一九四六年一〇月）²⁵、及び安吾自身がその「姉妹作」と位置付けた²⁶女性一人称による『続戦争と一人の女』（『サロン』一九四六年十一月）を発表している。『続戦争と一人の女』では、『肉体の門』同様、戦時中の「制約」から「解放」される女性の身体性を、自転車に乗る「私」の語りに見出すことが出来る。

私はある日、暑かつたので、短いスカートにノーストッキングで自転車にのつてカマキリを誘ひに行つた。〔…〕このあたりも町中が焼け野になつてからは、モンペなどとはかなくとも誰も怒らなくなつたのである²⁷。

天野知幸²⁸は、当時女性の労働着であつたモンペを履かず、「短いスカートにノーストッキングで自転車にのる」「私」の姿を「勤労精神や性道徳などを持たないということをあたたかもその身体で表明しているかのようだ」と指摘している。それと同時に注目されるのが「町中が焼け野になつてからは、モンペなどとはかなくとも誰も怒らなくなつた」、つまり、かつて機能していた「制約」が敗戦直前になると機能していなくなり、周囲が「私」の様子を黙認している

様子である。そこに戦中と戦後の分断があるといえれば言い過ぎであるが、戦中の「制約」が徐々に無効化されていく様子が描かれているとはいえるだろう。

『戦争と一人の女』では、主人公野村の視点から、同棲する「女」の「不具」な身体を捉え、「女」が爆撃によって身体的な充足を得ていることが語られる。そして敗戦後、急に苛立ち始める「女」に対し、野村は「女」の浮気がこれからはじまることを予感するとともに、その態度の変化から戦争は終わった。これからは空襲がないということはない、なんという張合いのないことだろう。野村ですら、そう思う。まして女は、そういう空虚を肉体的に嗅ぎ当て、その肉体の複雑な思考が始まっているのだろうと思われるのだ²⁹。

と、戦争の終了を実感する様子が描かれている。

以上のように、田村泰次郎『肉体の門』や坂口安吾『戦争と一人の女』『続戦争と一人の女』では、戦中と戦後の変化が、変容していく女性の身体に即して表現されており、戦中と戦後が明確に分断されていく構図が見出せるのだ。その一方で、『崩解感覚』では、戦中と戦後が分断されず、むしろ戦後に捉えるあらゆる事物が戦地で味わった〈崩解感〉へと還元され、及川隆一の身体は何ものにも統一され

ずに解体され続けていく。そのように、個人に残存し続ける戦争体験の根深さを執拗に描くところに同時代の文学とは異質な『崩解感覚』独自の価値が見出せよう。

三 おわりに

以上、野間宏「全体小説」の試みとの関連の中で『崩解感覚』を捉えてきた。まず第二章一節では、及川隆一が志津子を「特別な支点」とすること、「九段三丁目の上り坂」の先に拡がる「焼跡」や〈靖国神社〉、及び複数の接収地が背景化されていることを指摘し、そこに『崩解感覚』で不可視化された戦争や占領のありようを考察する回路を探った。続く二節では、志津子がパンパンを連想させる女性であるかのように語られつつも、否定も肯定もされず、さらに、及川隆一が志津子の「肉体」のみに注目することで志津子の素性が必然的に後景化しており、そこにも敗戦や占領を直視できない及川隆一のありようが見られることを指摘した。三節では、及川隆一が戦争や占領を直視できない原因として隆一の身体に残存する〈崩解感〉に注目した。そして〈崩解感〉が戦後に会おう志津子との性交、及び荒井幸夫の縊死体と「眩暈のような感覚」として連続す

るものであると捉え、戦地での体験と戦後が分断されないばかりか、あらゆる事象が戦争体験へ還元され認知してしまふ及川隆一のありようを明らかにした。即ち『崩解感覚』は、あえて「焼跡」や〈靖国神社〉及び占領軍が出入りする空間を不可視化することで、復員者の「心理」や「生理」に残存する戦争体験の根深さを暴いた物語である。しかし、その一方で『崩解感覚』は、発表当時、共産党員たちから猛烈な「近代主義」批判を受けたという³⁰。野間の創作意図と同時代の受容との齟齬は何を意味するのか。それについての検討は、今後の課題としたい。

【注】

- 1 平野謙「及川隆一の崩解感」(『文章倶楽部』一九五四年二月)
- 2 河内光治「野間宏『崩解感覚』」(『国文学 解釈と鑑賞』一九七七年九月)
- 3 野間宏の初期作品群のうち「暗い絵」「二つの肉体」「肉体は濡れて」「顔の中の赤い月」「地獄変第二十八歌」「残像」は、いずれも「肉体的に牽引を感じながら、精神的に反撥する恋愛を主なテーマ」(本多秋五『物語戦後文学史(全巻)』一九六六年三月、新潮社)としていと捉えられ、「肉体もの」と呼称されることがある。
- 4 (3)に同じ。
- 5 小笠原克「崩解感覚」(小笠原克、吉田永宏編『鑑賞 日本現代

文学 第二十四巻 野間宏・開高健』一九八二年四月、角川書店)

- 6 紅野謙介「蜘蛛」のいる街―野間宏『崩解感覚』試論―(『国語と国文学』一九八九年五月)

7 野間宏の「全体小説」に関しては複数の作家言説が残されているが、本稿では「私の小説観―暗い絵」から『真空地帯』への創作意図―(『文章倶楽部』一九五四年二月)を主に参照している。ここでは、野間が小説によって「人間の本質、人間の真実を追究し、それを捉えたいと考えている」ことが明言され、そのために「心理」及び、「それが結びついている人間の生理」を「追究」し、それと同時に「多くの人たちに被害を与え、日本の社会を破壊におとし入れてゆく戦争、この外側の社会のできごと」を捉えていこうとしていることが述べられている。

- 8 野中潤「戦後文学の時空―野間宏『崩解感覚』論」(『横光利一と敗戦後文学』二〇〇五年三月、笠間書院)
- 9 福島鏗郎編『GHQ東京占領地図』(一九八七年三月、雄松堂出版)の付録、復刻版『GHQ東京占領地図』参照。
- 10 加藤政洋「花街―異空間の都市史」(二〇〇五年一〇月、朝日新聞社)
- 11 上村敏彦『東京 花街・粋な街』(二〇〇八年八月、街と暮らし社)
- 12 『新編千代田区史』(一九九八年五月、東京千代田区)
- 13 井上章一『愛の空間』(一九九九年八月、角川書店)
- 14 接収地に関しては、佐藤洋一『図説 占領下の東京』(二〇〇六年七月、河出書房新社)を主な参考としている。

15 多川精一『戦争のグラフィズム 回想の「FRONT」』一九八

八年五月、平凡社）によると、東方社は太平洋戦争突入直前の一九四一年三月頃に、陸軍参謀本部の直轄で小石川区金富町（現・文京区春日）に設立されたが、建物が木造建築であり、空襲による焼失を憂慮して一九九四年五月、九段坂下の野々宮写真真館（現・北の丸スクエア）に避難したという。なお、東方社は、陸軍参謀本部の秘密機関として、ソビエトからの情報を分析整理して対ソ戦に備え、謀略宣伝用のポスターやビラの研究制作をやっていた「ソビエト研究所」を母体としている。

16 （8）に同じ。

17 マイク・モラスキー「解説」（『街娼 パンパン＆オンリー』二〇一五年一月、皓星社）

18 ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて（上）』（二〇〇四年一月、岩波書店）では、「パングリッシュ」が、「かつての教養高い高級娼婦のように、パンパンも特別な才能をもっていた。なかでも特筆すべきは、ちゃんぽん英語ができるという技能であった。それは娼婦の日本語と米兵の英語の混血言語であり、ユーモアをこめて「パングリッシュ」と呼ばれた。たとえ下手くそであろうとも、こうした第二言語でなんとかやっていくことは、敗戦後の日本では高く評価された技能であった」と説明されている。

19 共同通信社『The Chronicle ーザ・クロニクル戦後日本の70年ー1』

（二〇一四年一〇月、幻冬舎）

20 敗戦後の英会話ブームに関しては、ジョン・ダワー『敗北を抱き

しめて（上）』を主な参考とした。

21 佐藤洋一『地図物語 あの日神田・神保町』（二〇〇八年一月、ぶよう堂）には、九段下に近接する神保町の古書店街が空襲による焼失を免れ、「アカデミックな知識欲に飢えた」学生たちが詰めかける様子が、昭和二年七月に発売された「西田幾多郎全集」を買い求めに来る人々が岩波書店本社の前に二日前から行列を作ったというエピソードや、神保町交差点から駿河台まで続く露店で学生服姿の若者たちが整然と立ち読みをする写真とともに紹介されている。しかし、福岡良明『戦争体験者』の戦後史―世代・教養・イデオロギー』（二〇〇九年三月、中央公論新社）によると、年長知識人が戦没学徒の遺稿のなかに「教養の欠如」を感じ取っていたことが指摘されている。その理由を福岡は「終戦時点で三〇歳を上回っていた戦前派知識人は、日本が戦時体制に入る前に青春期を過ごしており、自由主義からマルキシズムにいたるまで、さまざまな教養書にふれる機会を持っていた」が、「終戦時に二〇歳前後の戦中派世代は、精神形成の時期が戦時に重なっており、読書傾向」が「制約」されたためだとしている。『崩壊感覚』でも、三〇代の及川隆一が、二〇代の荒井幸夫とのやり取りを回想し、「荒井幸夫が、思想と称びうるものを何一つ理解していなかったということは明らかである」と批判しているように、世代の差による教養の格差が象徴的に描かれている。

22 山田稔「実存主義と内臓感覚―野間宏論―」（渡辺広士編『野間宏研究』一九七六年三月、筑摩書房）

23 『崩解感覚』と「肉体文学」を比較検討するうえで、鈴木直子「解

説」(『占領期雑誌資料大系文学篇Ⅰ 第一巻』二〇〇九年一月、岩波書店)を参照した。鈴木は、田村泰次郎の「肉体が人間である」(『群像』一九四七年五月号)の一節を引用し、「思想」に対する「肉体」の優位性を謳いあげる田村の、頑強なまでの「思想」不信と、ほとんど唯物論的ですからある身体の絶対化は、占領期文学に通底する雰囲気でもあった」と述べ、田村泰次郎「肉体の悪魔」、野間宏「暗い絵」、坂口安吾「墮落論」「戦争と一人の女」を「身体・生理を表現の基盤に据えた作品」として取りあげ、敗戦直後の文学においては、「肉体こそが確かな手応えをもった表現の土台だったといえよう」と指摘している。

24 田村泰次郎「肉体の門」(『肉体の悪魔・失われた男』二〇〇六年八月、講談社)

25 坂口安吾「戦争と一人の女」は、『新生』掲載に際して、大部分が検閲によって削除されている。そのためか、安吾の生前は単行本に収録されることがなく『続戦争と一人の女』が「戦争と一人の女」として流布することになる。『新生』版「戦争と一人の女」は『坂口安吾全集第四巻』(一九九〇年三月、筑摩書房)に初収。無削除版は『坂口安吾全集第十六巻』(二〇〇〇年四月、筑摩書房)に初めて活字化された。なお、『戦争と一人の女』出版の経緯は、横手一彦「戦時期文学と敗戦期文学と——坂口安吾『戦争と一人の女』——」(『昭和文学研究』一九九九年九月)に詳しい。

26 『サロン』掲載時の『続戦争と一人の女』には「(新生特輯号の姉

妹作)」という作者坂口安吾の自注が付されている。

27 『坂口安吾全集第十六巻』(二〇〇〇年四月、筑摩書房)

28 天野知幸「坂口安吾『続戦争と一人の女』(『文学で考える(仕事)の百年』二〇一九年九月、翰林書房)

29 坂口安吾「戦争と一人の女」(講談社文芸文庫編『戦後短編小説再発見 2 性の根源へ』二〇〇一年六月、講談社)

30 野間宏・白井吉見「日本共産党の中の二十年」(『野間宏全集 第十六巻』一九七〇年十一月、筑摩書房)

【附記】本稿における小説の引用は、『野間宏全集 第一巻』(一九六九年一〇月、筑摩書房)による。なお、引用中の「……」は筆者による。

(立教大学大学院博士前期課程)